

NHKの一枚舌

戦後80年、マリマは歴史の煙草だ

「シミユレーション」昭和16年夏
八月十六十七両日 NHKは
の敗戦」と題したドラマを放映
した。その内容は、公共放送局の
あり方も含め多くの疑問を抱かせ
るものだった。望まずして、また
知らないうちに当事者にされた私
は、NHKとドラマを監督した石
井裕也氏の倫理観の欠如に深い怒
りを感じている。

史的事実の研究が蔑ろにされていいのではないか。視聴率を上げるために何をやつても許されると思つていいのではないか。フィクションの衣を被ることによつて、人の尊厳を傷つけていいか。歴史的事実を歪曲、捏造しているのではないか。歴史と向き合う時に求められる謙虚さに欠けるのではないか。そして何よりも総力戦研究所長・飯村穰の直孫で

あり多くの関連資料を持つている
私、そして一族には全く接触・取
材をせず、私どもが気付いた時に
はドラマが出来上がつており、一
切の修正が拒否されるという事態
がなぜ起きたのか。石井氏と制作
チームが史実に关心がなかつたと
言わざるを得ない。つまり歴史を
後世に伝える能力も資格も持ち合
わせていないということである。

舞台となつたのは近衛文麿内閣
で総理直轄機関として開設された

総力戦研究所たる新しい戦争の形態と國家・社会の関係についての調査・研究と人材育成を行い、あわせて日本社会で顯著な縦割りのシステムを超えたエリートたちの連携を強めることを目的とし、昭和

十六年四月、研究所に第一期生として若手官僚、民間人、軍人らが集められた。プログラムの一つとして同年夏に行われたのが、日米戦争が起きた場合のリスクを予測した机上演習だ。

いしむら・ゆたか 暁和二十一年 東京
都生まれ。東京大学在学中に外交官試験に
合格。四十四年に外務省入省。経済協力局
長、官房長などを経て駐インドネシア大使
使、駐フランス大使、中東担当政府代表を
歴任した。ハーヴィード大学国際関係研究所
所フェロー、フランス国立高等社会科学院
究院シニア・フェロー、東京大学公共政策
大学院客員教授、同総長選考会議議長など
も務めた。現在は外交安全保障研究所フォー
ラム代表。

人、平均年齢三十三歳の研究生が、當時どのような議論を重ねたかは、猪瀬直樹氏のノンフィクション『昭和16年夏の敗戦』に詳しい。N H K が七月十六日に発表した告知文によれば、同書を原案に「実話に基づくドラマ」を制作しようとしたようだ。その言葉通り、昭和天皇、近衛文麿はもちろん、近衛内閣の陸軍大臣だった東條英機らも実名で登場する。その一方で、猪瀬氏の著作では実名だ

「日米間の戦争が起きれば日本は必ず負ける」との結論は近衛总理以下政府首脳に報告された。しかし、実際の政策には反映されず、日米は開戦し、その後の展開はおおよそ演習通りとなつた。眞理は、千五百の切札をもっても

名を使おうと机上演習を行つた際の所長は飯村穰以外にはいな。仮名であることに安心してか、関係者の性格や行動は、事実に基づくことなく、監督、制作者の自由奔放なイメージで描かれた。ドラマで所長だった陸軍少将、板倉大道は番組の告知文で当初、次のように紹介されていた。

「若きエリートたちの頭脳をアメリカとの戦況予測に使うべく研究を開始させる。だが、軍上層部の思惑とは異なる研究結果が出始めると、自由な議論の“最大の壁”となつていく」

しかしそれは現実の祖父とはあまりにかけ離れている。各種史料や関係者の証言などからは、研究生がのびのび議論できるよう後押しすることに心を配つていた祖父

飯村曲



の姿が見えてくる。そもそも、シミュレーションの確度を高めるには自由闊達な議論が不可欠だ。

また、後述するがシミュレーションから七年も遡った昭和九年、祖父が提唱し、陸軍参謀本部内で同じような机上演習が行われており、そこで祖父の動きから言っても、ドラマが描くような『日本必敗』の予測を妨害しようとしたなどとの話はあり得ない。陸軍は好戦的な軍人のみによって構成されていたわけではなく知性を重んずる国際派の軍人たちもいたのであり、祖父のように米国との戦争が日本に何をもたらすかを危惧する人々も少なくなかつたのだ。

このような無理な設定をしたドラマ制作者の意図は何か。

歴史的事実を裏切つてまで、作劇上の無理な詐術を使つたのはドラマを面白くし、視聴率を高める

目的があつたと思わざるを得ない。ドラマチックな物語を作るため総力戦研究所所長と模擬内閣の閣僚たちに指名された研究生を对立させ、陸軍の軍人は好戦的であり、事あれば若い人たちを怒鳴り上げ、暴力を振るう構図を求めたのだろう。

その種のステレオタイプはそろそろ卒業していただきたいと思うが、ドラマ制作関係者の前には大きな落とし穴があつた。私がまだ生きていて、多くの一次資料を保管しており、声をあげうる状態にあつたということだ。今のような状況は、想像だにしなかつたのである。そもそも、関係者に取材し事実関係をチェックすることにはひとかけらの関心をも有していないなかつた。実際、私に全く取材はなかつた。

「総力戦研究所長が日本必敗の時間がない、俳優のチームはもう解散した、京都・太秦のセットは解体してしまつた」。

NHK側はそんな理由を挙げ、私からの番組内容の修正要求には一切応じなかつた。受け入れられたのはテロップの挿入などにより、この番組の内容、祖父等の人

間像がフィクションであることを視聴者に分からせる「小細工」だけである。

視聴者からすれば著名な俳優たちが迫力で演じた登場人物は強烈なインパクトで、テロップなどによる「これはフィクションだ」とのメッセージを圧倒していた。

「このドラマは史実なのか、フィクションなのか分からぬ」との混乱も呼んだ。

そもそも、番組制作自身、私にはこのドラマはフィクションと述べる一方、放映直前には真逆の発言をしている。制作統括の一人でNHKの新延明氏は八月十四日付の産経新聞記事で「当時の史料に加え、戦後の関係者の証言などを幅広く集めた」「かなり実態に近づけたと自负している」などと述べている。彼ら自身、良く言つて混乱し、悪く言えば二枚舌を使

つっていたのである。

このような不誠実な制作姿勢は、後世に歴史を伝える使命を帯びた公共放送に相応しいものと言えるであろうか。さらに言えば人間としての倫理に悖るのではないだろうか。

「空想の産物

「自由な議論の『最大の壁』」といふが、これは総力戦研究所がなされたか知らない人たちの空想の産物である。

というのも、そもそも総力戦研究所というのは、自由な議論を官民軍の敷居を超えて行うことにより、新しい危機に対応しようという組織である。組織創設の経緯をまったく学ばずにこのドラマが書かれたのではないかと感じざるを得ない。私の狭い知識からではあ

るが歴史的背景を振り返りたい。それにより「若者と頑迷な軍人達との対立」という構図も含めて今回の中のドラマがいかに的外れだったかより理解いただけるだろう。話は第一次世界大戦（WWI）まで遡る。WWIは国家、戦争、社会のあり方に大きな影響を与えた歴史的転換点であった。歐州大陸にあつた巨大な帝国群が崩壊し、多くの新しい国民国家が成立了。歐州各国が衰弱する中で、米国が台頭し、ロシアでは社会主義革命が起きた。敗戦国ドイツに復讐主義が生まれ、後のナチス・ドイツ誕生のきっかけとなる。戦争の形も軍隊同士の短期決戦型から長期消耗戦を伴う総力戦となつた。戦車、航空機、潜水艦などが登場し、戦争の規模が大きくなり、WWI以降の主要国間の戦争は軍隊同士の戦闘だけではなく、

経済力、政治力、思想、文化など、国家のあらゆる力がぶつかり合う「総力戦」になることが明らかになつてきたのである。より具体的に言つとWWIの西部戦線で、独仏軍が激突したマルヌの会戦で、戦線が膠着し、塹壕戦に入り、戦争が長期化したことに端を発する。現在ウクライナ戦争でも、さまざまな技術の発展によって、従来とは異なる戦争の形が現れてきているが、同じようなことが、より巨大なスケールで起つていた。戦争は科学技術を発展させ、科学技術の発展は戦争の形を変え、社会の形を変える。これは人類の歴史の中で普遍の真理である。

歐州の諸大国において技術の進歩を踏まえた総力戦の研究と対応が求められるようになつた。特に英國、フランス、ドイツなどの政治家・軍人・知識人の間で、「従来のような軍隊と軍隊の衝突だけでは終わらない。国家の「総力」をかけた戦いになる」との認識が共有され始めた。

たとえば英國では一九二〇年代の初めにウインストン・チャーチルが、「これからは国力を総動員して、軍人だけではなく民間人や官僚、つまりセクション（部署）を超えて研究を進める組織が必要だ」と唱えた。その結果として、二七年に「ロイヤル・カレッジ・オブ・ディフェンス・スタディーズ（英國王立国防大学）」が設立された。それに続く形で、数年遅れてフランスにも同様の研究所が設けられた。

そうした流れを日本の陸軍内でも国際的で、理知的な将校たちは認識しており、またヨーロッパに駐在していた軍人たちは、その動きを間近に見ていた。

か中国とフランスに外国事情研究のため滞在していた西浦進氏（戦後に防衛研修所戦史室長）も、同種の問題意識を抱いていた。時期は少し違っていても、それぞれの任地でこうした「日本も新しい戦争の形に備えるための研究機関をつくるべきだ」と考えた将校たちが、政府に提案を始めていた。

ただ、昔も今も変わらないのが日本のセクショナリズム（縦割り意識）。特に、軍事機密を民間人に開示していいのかという議論があり、日本では英國のような体制

をすぐに整えることができなかつた。この間、辰巳氏の伝記に次のような話が書かれている。

三七年、秩父宮殿下が、英國で行われたジョージ六世の戴冠式に出席された際のことだ。式典終了後、殿下から「自分が日本に帰つてからやるべき仕事はないか」と聞かれたという。辰巳氏は、王立国防大学に触れ「日本でもこういうことを早くやつた方がいいのではないかですか」と進言した。殿下は「ぜひ自分も尽力したい」と仰

り、それがその後の動きに繋がつ

“非”開戦論者

こうした背景を踏まえた上で、

来のような軍隊と軍隊の衝突だけでは終わらない。国家の「総力」をかけた戦いになる」との認識が共有され始めた。

たとえば私の祖父、飯村穰はトルコに派遣されており社会主義革命が起きたソ連の動向を観察し、社会主義革命の総力戦化に注目していた。回顧録にはトルコ在任中の『赤軍の戦略・ソ連の社会戦争』と題した仏語の本を訳して参謀本部に報告し、それまでの「武力戦争すなわち戦争」との観念に染まつていた陸海軍や外務省に相当な衝撃を与えたなどとある。

また、戦後、吉田茂首相の非公式な軍事顧問として活躍したことで知られる辰巳栄一氏は、WWII後の英駐在武官時代、英國で総力戦の研究と対応が進められ、王立国防大学の卒業生が官民軍の各セクターで中核的地位を担つていることに強い印象を受けていた。祖父と辰巳氏がロンドンで会い、総力戦への対応について話し合つたことも記録に残つていて。このほ

ていつたという。日本の総力戦研究所が正式に発足したのは特にイギリスに遅れること十四年、四一（昭和十六）年四月だった。

「もつと早く総力戦研究所のようなものができていれば、戦争研究が進み、無謀な戦争を回避できたのではないか」と言われる方もいる。しかし、残念ながら当時の日本は、そうした体制を早く整えることはできなかつた。

改めてドラマの内容に触れてみよう。先述したように放送前、NHK側とは協議を重ねてきた。番組がどういう内容になるか脚本なり概要を見せて欲しいとの要望は一切応じていただけなかつたので、番組を実際にこの目で見た時の印象は強烈であつた。

作中で研究所長だった板倉大道は、模擬内閣で総理を担つた宇治田洋一ら研究生や関係者をあの手この手で追い詰めていく。宇治田には「不都合な報告は上にあげられない」「空氣」に逆らつてもいいことはないと恫喝し、企画院次長役として日米開戦に消極的だった宮本達夫に召集令状を出すことで見せしめとする。さらに宇治田の弟、英二にも「赤紙」を送つてプレッシャーをかける。それでも演習の議論が開戦回避へと傾いていくと、最後には「面倒に

の編集に当たつたのは磯村（武亮、NHK元フランス特派員などを歴任した磯村尚徳氏の父、同）少佐である。演習は毎日行つて十日ほど続いた。記録は三部作り、一部は参謀本部第二部に保管し、他の一部は作戦課長になつて着任してきた石原莞爾大佐に、一部は私のところに保存したが、終戦後米軍の手に渡さないため焼却した。：（略）：辰巳少佐が想定した敵の進路は実際に行われたものと全く同一であった

この机上演習だけでなく、陸軍省軍務局秋丸機関、企画院などいくつかの組織が日本の国力では米国との戦争遂行は困難との調査結果を出している。米国との戦争がもたらすリスクに警鐘を鳴らし続けた祖父らが開戦論者に転換されるのは事実の歪曲もしくは歴史の捏造と言える。

で、番組を実際にこの目で見た時の印象は強烈であつた。

作中で研究所長だった板倉大道は、模擬内閣で総理を担つた宇治田洋一ら研究生や関係者をあの手この手で追い詰めていく。宇治田には「不都合な報告は上にあげられない」「空氣」に逆らつてもいいことはないと恫喝し、企画院次長役として日米開戦に消極的だった宮本達夫に召集令状を出すことで見せしめとする。さらに宇治田の弟、英二にも「赤紙」を送つてプレッシャーをかける。それでも演習の議論が開戦回避へと傾いていくと、最後には「面倒に

の編集に当たつたのは磯村（武亮、NHK元フランス特派員などを歴任した磯村尚徳氏の父、同）少佐である。演習は毎日行つて十日ほど続いた。記録は三部作り、一部は参謀本部第二部に保管し、他の一部は作戦課長になつて着任してきた石原莞爾大佐に、一部は私のところに保存したが、終戦後米軍の手に渡さないため焼却した。：（略）：辰巳少佐が想定した敵の進路は実際に行われたものと全く同一であった

この机上演習だけでなく、陸軍省軍務局秋丸機関、企画院などいくつかの組織が日本の国力では米国との戦争遂行は困難との調査結果を出している。米国との戦争がもたらすリスクに警鐘を鳴らし続けた祖父らが開戦論者に転換されるのは事実の歪曲もしくは歴史の捏造と言える。

不退転の決意

ドラマの視聴後、私は自分なりの当面のアクションプランとして三つの目標を立てた。

一つはNHKに謝罪・訂正を求める。また総力戦研究所につき史実にそつたドキュメンタリー番組を作るよう要求すること。二番目にはBPO（放送倫理・番組向上機構）に訴えることだ。

まずNHKの幹部に申し上げようと考え、井上樹彦副会長、小池英夫専務理事にアポイントを申し入れたが、遺憾ながら完全に無視された。終戦八十年という大切な機会に公共放送NHKが歴史の捏造という大きな過ちを犯したこと

わざるを得ない。それでも、こうした問題をNHK側に認識してもらいたいとの気持ちを公に知つてもらう方法を模索した結果が、八月二十六日の記者会見であった。想像以上に多くの記者の方が集まつてくださり、今回のNHKの醜態が大きな反響を呼んだことを知つた。

その後も雑誌・新聞・ネットなどで各分野の方々から応援の声を頂いており、多くの方が私たちの行動を支持し、NHKへの強い批判の気持ちを共有してくださつてること、また私のケースのみでなく、その他の多くの番組でもさまざまな問題があることを挙げ、NHKの放送倫理のあり方に対し批判的な気持ちを持つておられることがわかつた。

不退転の決意で戦いを続けていきたい。

そしてやはり総力戦研究所の若い研究生たちが米国との戦争に反対し、陸軍の開戦派と対決したというストーリーは無理があろう。祖父は陸軍参謀本部で欧州課長を務めていた昭和九年、「米国と戦つたならば、どうなるかを真剣に考えているのか」などと心配

し、部内で極秘に机上演習を実施していた。当時、ロンドン海軍軍縮会議の結果を受け、統帥権干犯問題が提起され、世論は沸騰し、対米主戦論も盛り上がりつつあった。

この時の演習の報告書そのものは残念ながら現在、散逸してしまった。祖父の回顧録にある「王手の街中で突然与太者に喧嘩をふつかれられたようなものである。

「自分は支那課を含めた第二部の部員を専修員として、岡上演習を行つた。戦時財政を専門に研究している森（武夫、筆者註）主計少佐にも参加してもらい、参謀本部の他の部員の参加も随意にした。米軍には辰巳（栄一、同）少佐があり、私の補佐官として記事